

精神科看護

THE JAPANESE JOURNAL OF PSYCHIATRIC NURSING

2015

vol.42 通巻279号

「精神科看護」編集委員会 編

持ち物制限から 見えてくる看護

- ☑ 精神科病院における私物持ち込みの制限をめぐって
- ☑ 【座談会】私物持ち込みの制限の見直しを通じて
- ☑ 物品制限に関する各病棟の判断

【クローズアップ】 瀬野川病院

精神看護出版



瀬野川病院

<広島県広島市>

撮影：大西暢夫



◎精神科救急医療の中核として

JR広島駅から電車で揺られること約15分。病院名にも冠せられている瀬野川のほとりに瀬野川病院が開院したのは1959(昭和34)年のこと。以来、近隣地域のみならず、広島県の精神科医療を支える中核病院の1つとしてその役割を担ってきた。

瀬野川病院を特徴づける役割の中心に精神科救急医療がある。広島県には国公立の精神科病院が存在しないため、民間病院である瀬野川病院が精神科救急医療センターの役割を担い、24時間365日体制で受け入れを行っている。西部と東部に分けられた救急医療圏のうち、瀬野川病院が担当するのは西部地区だが、時には車で2時間以上かかる県北部からの要請を受け、受け入れや往診を行うこともあるという。

また、統合失調症、気分障害、認知症のほか、歴史的経緯から(p.40を参照)薬物・アルコール依存症の患者さんが多い点にも瀬野川病院の特徴があると精神科救急入院料病棟の馬明康宏課長補佐は話す。短い期間

のなかで多様な疾患をもつ患者さんに専門性の高いケアを提供することには相応の苦勞があるのではないだろうか。馬明さんはこう話す。「当院では“疾患別プロジェクト”という治療プログラムを設けています。これは、同じ疾患をもつ患者さんが病棟を跨いで一か所に集まり、病気のこと、治療のことなどを勉強していただくというものです。依存症の場合には、そのなかに自助グループへの参加も含まれており、約3か月のプログラムが組まれています。病棟ではたしかにさまざまな疾患をもつ方が混在されていますが、ある程度回復された段階でこうした疾患別プロジェクトを導入していくので、一定の専門性をもったケアを提供できていると思います」。

その一方で、現在このような課題もあるのだと馬明さんは話してくれた。「当院では完全に受け持ち制を導入できていない現状があり、患者さんへのかかわりの度合いに差がでてしまっているところもあるように思えます。この点は、病院全体で取り組みながら、少しずつ体制を変えていければと思っています」。





◎地域に溶け込む施設に

瀬野川病院の周辺には、複数のグループホームやハーフウェイハウス、また法人が借り上げた民間のアパートが確保されており、それぞれの患者さんの生活能力に応じた「暮らしの場」が提供されている。「さまざまな意見がありますが、病状に変化があったとき、すぐに医療につなぎ、早期に対応ができるということは、やはり住む場所が病院の近くにあることのメリットだと思います。そういえば以前、深夜に具合が悪くなった患者さんを別の患者さんがリヤカーに乗せて運んで来てくれたことがありました」。高下蓮美看護部長はそのように話す。瀬野川病院を中心としてこれら関連施設が点在する地域には、1つのコミュニティのような雰囲気が流れている。

こうした関連施設のなかに、多機能型就労移行支援事業・就労継続支援B型事業所『ジョブハウスノイエ』がある。ここでは、パンの製造販売のほか、お好み焼き店が運営されており、昼の時間帯には多くのお客さんで賑わい、地域住民の憩いの場にもなっているという。現



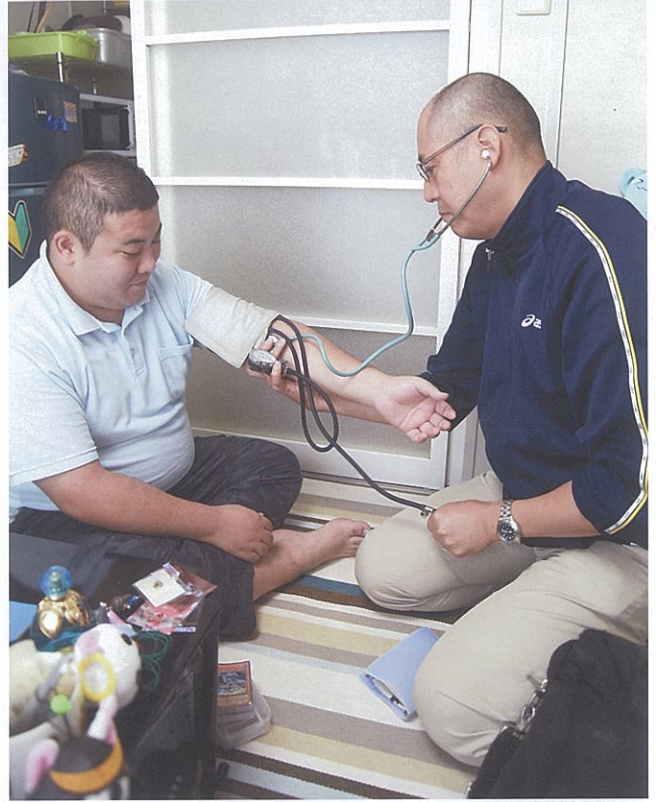
在、登録者は12名。開設して5年目を迎えるが、これまでに約10名の利用者さんが就労につながったそうだ。「以前、別の事業所にいたこともあったのですが、ここは和気あいあいとした雰囲気があって働きやすいですね」。利用者さんの1人はそのように語ってくれた。

先に『ノイエ』が地域住民の憩いの場になっていると述べたが、瀬野川病院ではそのほかにもプロのバスケットボール選手を招いて地域の子どもたちと交流を深めるなど、地域の活動拠点となるための地道な取り組みがなされている。その背景には精神疾患の啓蒙・啓発と同時に、「地域に溶け込む施設」であろうとする瀬野川病院の意志がある。

◎いつでも、どこでも、だれでも

「いつでも、どこでも、だれでも」という法人の基本理念のもと、精神科救急医療に尽力してきた瀬野川病院だが、一方で退院後の生活を支える訪問支援にも力を注いできた。現在法人がもつ4つの訪問看護ステーシ







正面に見える建物が多機能就労移行支援事業・就労継続支援B型事業所『ジョブハウス ノイエ』。左手の建物が瀬野川病院。瀬野川病院を中心に、周辺にはグループホーム『ミットレーベン』『アイネクライン』『アンゲネーム』、ハーフウェイハウス『Senoリバービレッジ』などの中間施設も点在している。



ョンによって県内のほぼ全域がカバーされているが、なかでも興味深いのは病院付設の訪問看護『SANS』の取り組みである。これは、初回入院などで治療継続が困難な方、他の訪問部署では対応が困難な方などに対し、病棟で治療にかかわった看護師・精神保健福祉士が直接訪問に出向くシステムである（毎日各病棟から2チームほど訪問にでかけているそうだ）。「ある程度関係性ができあがっているスタッフが地域でかわることは、患者さんはもちろんのこと、ご家族にも安心感を与えるようです」。在宅支援事業部管理者の新川恵美子さんはそう話す。原則3か月を目途に介入し、問題がなければ、以降は他の訪問部署に引き継がれるのだそうだ。

訪問するエリアは県全域におよび、また病棟の人員も割かれるため、臨床現場からすると厳しい側面もあるかもしれない。しかし「病棟のスタッフが患者さんの地域生活を直接目にするの意義は大きいと思っています

す。それに関係性があらかじめできていることで、状態が悪化した場合にもスムーズに治療につなげることができ、その結果早期に退院していただくこともできます。そうした循環を生みだせるという点でも、SANSの意義を大きいと感じています」と新川さんは話してくれた。



SANSとは、SENOGAWA 3A NETWORK SYSTEMの頭文字をとったものだが、ここでいう3AとはAnytime, Anywhere, Anybodyの略である。つまり、SANSの取り組みとは「いつでも、どこでも、だれでも」という基本理念を端的に体現したものである。1966（昭和41）年に津久江一郎院長（現会長）の就任より精神科救急医療に力を注いできたという瀬野川病院の「医療の手」は、変わることはない理念のもと、いま、より広い地域へと広がろうとしている。

「院長」に訊く

入院から社会復帰までをトータルに見ずえる視点

医療法人せのがわ瀬野川病院 院長

津久江亮大郎さん



当

院は精神科救急医療センターとして広島県の広域をカバーし、県内の精神科救急医療の中核的な役割を担ってきました。精神科救急医療は当院の軸になってきた分野であるといえます。

加えて、精神科救急医療のほか、依存症治療、司法精神医療といった分野においても昔から専門性をもった治療にあたってきました。とりわけ、先代の津久江一郎院長（現会長）がアルコール依存症の研究に従事されていたということもあり、依存症治療は当院のはじまりにおいても重視されてきた分野でした。当院が立ち上げられた時代には有機溶剤の依存症が社会問題になっており、また広島県は覚せい剤の使用率が他県に比べて高く、それに伴う依存症や精神症状の治療が求められていたということも背景にあります。

また、医療の入り口として精神科救急がある一方で、退院後の地域生活を支援するための取り組みにも力を注いできました。その1つとして、当法人では、グループホームやケア付き共同住居など、社会復帰に向けた中間施設を複数設けています。社会のなかで生きていくということは、健康な方にとっても決して楽なことではありません。精神的な障害をもたれている方は生きる力が弱っているわけですから、そのハードルは一層高く感じられると思います。もちろん社会復帰施設に行けば直ちに生きる力を取り戻せるというほど現実には甘くありませんが、2段階飛ばして階段を上るところを1段階ずつじっくり登っていきけるようにするための仕組みとして、中間施設を利用いただければと思っています。

最後に、精神科医療は入院医療から地域医療中心へと転換されていっています。そのなかで、現在も力を注いでいますが、訪問支援を今後はより深化させていきたいと考えています。具体的には、訪問看護のスタッフが訪問先にさまざまな治療プログラムをデリバリーする、利用者さんの自宅で簡単なセッションをできるようにするというイメージです。また広島ではフラワーフェスティバルという大きなお祭りがあるのですが、そこに当院の就労支援施設が出店するなどの取り組みも行っています。直接医療にかかわるわけではありませんが、こうした精神疾患に関する啓発・啓蒙を通して精神医療を社会のなかに溶け込ませていきたいですね。そのことによって、患者さんが社会に戻っていく際の道筋をいまよりもつけやすくなるのではないかと考えています。

医療法人せのがわ
瀬野川病院

〒739-0323

広島市安芸区

中野東4丁目11-13

TEL: 082-892-1055

FAX: 082-892-1390

URL: <http://www.senoriver.com>

●診療科: 精神科・心療内科・
内科・放射線科・歯科

●職員数: 495人

(平成27年11月現在)

●病床数 325床

(精神保健指定病床数85床)

精神科救急入院料病棟1112床

精神科一般病棟 213床

●関連施設

- ・よこがわ駅前クリニック
- ・地域生活支援センター『モルゲンロート』
- ・グループホーム『ミットレーベン』『アイネクライン』『アングネーム』
- ・ハーフウェイハウス『Senoリバーレッジ』
- ・多機能型就労移行支援事業・就労継続支援B型事業所『ジョブハウスノイエ』
- ・訪問看護ステーション『ビジテ』『ビジテ並木』『ビジテ呉』『ステラ』ほか

